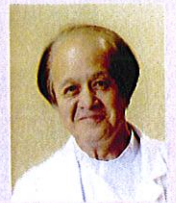


今年の抱負

大阪市西部医療圏の地域医療支援病院として 高齢化社会をどう迎えるか

独立行政法人地域医療機能推進機構 JCHO大阪病院(旧大阪厚生年金病院) 病院長 山崎 芳郎



この4月でグラントオープンから2年になります。2025年に向けて高齢者が増えて疾病構造も徐々に変わります。身障者用のエレベーターが小さかったが、手押し用車椅子が2つ入るとつばいなので利用者が予想以上に増えています。手足の不自由な方はもちろんですが、そ

れ以外の内科疾患、耳鼻科疾患、眼科疾患等で通院される方がご自分の車椅子や歩行器を使って通院されておられます。身障者用の駐車場も殆ど満車の状態です。しかし今更エレベーターを3基の更エレベーターも身障者の方々に優先してありますが、それでも特に午前中の外来時間帯では、患者さんだけでなく付き添いの方が車椅子で来られることも多く、まさに車椅子社会到来です。加えて、お見舞い等のお母さん方かベビーカーを押してこられるので、さらにスペースが足りません。今から病院を建てられる際には、高齢化社会が来ているのでエレベータースペース

を広く取るようにとアドバイスさせていただきます。入院患者さんには病棟の評判がいいです。どこからでもいろいろな方向に大阪近郊風景を見ることができ、光がよく入って明るいので、療養環境は非常にいいと思います。新しい建物は非常に密閉性が高く乾燥しているので、昨年7月には静電気摩擦による火花が揮発性の薬品に引火して発火しました。しかし、密閉性、耐火性が高いので類焼もなくその一部屋を焼いただけで済みました。高層で起きた火事ということで消防車が13台も来ましたが、被害は小さかったです。また、津波に備えて電力源を7階に

置いてありますから、患者さんを運ぶスリッパの入れエレベーターは災害時でも動くようになっています。建物の減価償却期間が39年ですが、厳しいです。医療機器のそれは数年ですが、建物はそうはいきません。毎年定額を返していかなければなりませんから大変です。設備、機器の保守点検費用もバカになりません。急性期疾患が少しずつ減つてくると患者数も減ってきます。3大死因も、従前はがん、心筋梗塞、脳梗塞でしたが、最近では脳梗塞で死亡される方が少なく、肺炎が3番目です。治るのにも時間がかかりますから急性期病床を占めるのも肺炎の患者さんが多くなりつつある

西明石の旧病院では外来患者数は約1700人とクリニックが約30人だったのが新病院では約1200人、旧病院跡地で引き継いだクリニックで約40人、まだまだですが、引越してきた地域の人がやがて認識されつつあり、良い形で移行ができていくと思えます。入院について話させてください。当院は一般救急と生活習慣病と消化器疾患、整形外科疾患、緩和ケアを得意としています。特に脳血管系や循環器系の疾患が見つかれば速やかに他院を紹介いたします。自分の専門外だからといってはめから断るのではなく、また専門外なのに取り込むのではなく、早期のトリアージで患者さんにとってはベストの治療を受けられます。そういう住み分けが大事と考えます。病診連携に関しては、クリニックにできることは譲っておかないで、なまなま、地域包括ケア病棟は在宅医療をサポートしてもうまくいっています。また在宅復帰率ももうまくいっています。また急性期病棟では整形外科に

門医を取ったあとに目指す総合医です。一階建て専門医としての総合医はまだ人気がありません。総合診療科として頑張っているJCHO病院もあるのですが、全体としてはまだまだです。今JCHOに求められるものとして考えたのが「絆の継承」です。先ずは地域との絆ですが、それ以外にも職員同士との絆、職員と患者さんの絆、JCHO本部と病院の絆、いろいろな絆を発展的に継承していかなくてはいけないと思うのです。それとリバージョンです。ある程度改善、修復しないと、時代に取り残されていきます。今はターニングポイントだと思えます。独立採算制というのはかなりきついです。雪崩的に医師が辞めてしまつて致命的になります。早く手を打たなくてはなりません。そういう意味で「絆の継承」が必要かと考えています。当院は、現時点で急性期の一般病床ですが、将来的には回復期リハビリや地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟も必要になってくるでしょうね。

今年の抱負

健康に過ごせる山陽電鉄沿線 元気な時にも行きたいと思える病院に

医療法人社団医仁会 ふくやま病院 明石市 理事長 譜久山 剛



●移動しての感想
山陽電鉄「西新町」駅前に新築移転して1年3カ月が経ちました。高架の駅が新しく作られ今までの電車の軌道跡に細長い空地ができたので、そこを明石市に半分歩道、半分自転車道に整備していただきました。病院南側に車が入ってこない、安全にリハビリができる300mくらいのスペースができたんですね。植

樹はこれからですが、いい環境になると思います。まちなかの車椅子の移動とカノルディックウォーキングなどができるといいですね。病院建物側には何力所かオープンテラスのように出入りができる窓があります。中と外がつながる空間が出現します。そして次年度には駅前に広場が出来ます。車がほとんど入らないので、広場で野外コンサートなども計画できます。そして東面の窓を開放したら、院内に居ながらにしてその音を楽しむことができます。僕たちは病院を通じて文化活動をしていきたいと思います。外来の待合室の本棚、まちライブラリーや年に数回開催する落語会やコンサートもその一環で

す。街の中に病院があっても、必要でなければ行きません。行っても楽しくないのが普通です。病院はないと困るけれど、元気な時にはあまり行きたくない場所ではありません。しかし当院は大規模な基幹病院ではなく、中小病院です。例えば血圧や体重を計りに来たりで、日常的に訪れてもらえるような、そういう立ち位置でいいのではないかと考えています。まちライブラリーを見せました。いま考えているのは、医療漫画や私たちが医療従事者が一般の人に読んでほしい本を置いて、受診に来た人だけにではなく、電車に乗る人がついでに寄ってくださるような本棚にしたいなと思っています。

●経営面
西明石の旧病院では外来患者数は約1700人とクリニックが約30人だったのが新病院では約1200人、旧病院跡地で引き継いだクリニックで約40人、まだまだですが、引越してきた地域の人がやがて認識されつつあり、良い形で移行ができていくと思えます。入院について話させてください。当院は一般救急と生活習慣病と消化器疾患、整形外科疾患、緩和ケアを得意としています。特に脳血管系や循環器系の疾患が見つかれば速やかに他院を紹介いたします。自分の専門外だからといってはめから断るのではなく、また専門外なのに取り込むのではなく、早期のトリアージで患者さんにとってはベストの治療を受けられます。そういう住み分けが大事と考えます。病診連携に関しては、クリニックにできることは譲っておかないで、なまなま、地域包括ケア病棟は在宅医療をサポートしてもうまくいっています。また在宅復帰率ももうまくいっています。また急性期病棟では整形外科に

●これからの展望
山陽電鉄沿線には各駅の近くに病院が多いので、基幹病院である明石医療センター、明石市立市民病院、民間病院の石井病院、あさひ病院、精神科の明石こころのホスピタルとどの病院も駅の傍に暮らせる。明石は住みやすい町と言えます。山陽電鉄沿線に住んでいても健康に暮らせる。明石は住みやすい町と言えます。山陽電鉄沿線に住んでいても健康に暮らせる。明石は住みやすい町と言えます。山陽電鉄沿線に住んでいても健康に暮らせる。明石は住みやすい町と言えます。

●小さなエリアでは3棟の築40年の集合住宅が近くにありますが、お住いの方々の老後を見守っていくにはどうしたらいいか、最近よく考えています。医療機関が全てを担えるとは思っていません。だからと言って行政が全てやるべきであるとも思わないのですが、何か人が集まる場所やプログラムを創り、レジャー化していきないうかが、例えば、健康教室を開き、自分たちの健康は自分たちで守ろう意識を持ってもらうようなことです。いま、おられる空間はコミュニティホールと名付けました。行政の協力もいたいて、災害時には避難場所、日頃は人の集まる場として使います。病院はただ電化での災害時の発電機がただ持っているだけではこれからの課題です。でも、こんなホールが用意できなくても病院の待合室など、土曜日の午後や日曜日には、空間として使える場所になると思いたいです。見知らぬ人と知り合えるような場、ちよつと生活を変えようと思えるような場になると思います。医療機関が来たかと思える場所でありたいです。そうなるように発信したいと思います。